

体験学習を通じた民主主義再学習の思想的背景¹ —民主主義・科学・プラグマティズム—

土屋 耕治

(南山大学人文学部心理人間学科)

要旨

本論考は、体験学習を通じた民主主義の再学習の展開を支えた、アメリカにおける思想的背景について論じる。具体的には、民主主義、科学、プラグマティズムというキーワードに加え、アメリカの反知性主義、レヴィンとNTLの展開について紹介し、「よい理論ほど実際に役に立つものはない」という言葉が、民主主義・科学・プラグマティズムというキーワードの接合点として存在していたことについて論じる。最後に、民主主義と科学に関する現状の理解を紹介し、今後の展開に関して必要な論点を紹介する。

キーワード

体験学習、民主主義、科学、プラグマティズム、NTL

背景

本論考の目的

本論考は、体験学習を通じた民主主義の再学習の展開を支えた、アメリカにおける思想的背景について、主に、民主主義、科学、プラグマティズムという言葉を中心に論じる。体験とそのふりかえりを通して、人間関係について学んでいくラボラトリー体験学習、また、組織の効果性・健全性・自己革新力を高める組織開発において、民主的（democratic、民主主義的、と訳されることもある）であることは大切にすべき価値観として紹介される。その始発点として、レヴィンについて言及されることはあるものの、それがアメリカ社会で受け入れられ広がっていった背景について、他の思想的背景にも触れつつ、その関連を

¹ 本研究は、2019年度、南山大学バツへ研究奨励金I-A-2の助成を受けた。

紹介しているものは少ない。本論考では、民主主義、科学、プラグマティズムというキーワードに加え、アメリカの反知性主義、NTLの展開について紹介し、レヴィンやNTLの展開が、民主主義・科学・プラグマティズムというキーワードの接合点として存在したことについて論じる。

民主主義

その歴史を振り返るとわかるように、アメリカは自由と平等、民主的であることを求めた社会である。ジェファソンやデューイはアメリカを民主主義的自由主義のための共同の「実験」の場と称したこともあるようだ（仲正、2008）。

民主主義（democracy）とは何か、ということをも具体的な様態とともに一義的に定めることは難しい。たとえば、Brown（2015 中井訳 2017）は、民主主義とは、「人民すべてが政体を統治し、ゆえに自分たち自身を統治しているような政治形態の名称」と紹介している。そのうえで、この政治形態がどうすればうまく達成できるのか、どのような経済的、社会的、文化的、神学的状況と実践によって補完すればよいのかについては、議論の余地があること、また、それが、歴史的に変化しようと述べている。その結果、民主主義には、直接民主制、代議制、自由主義、社会主義、リバタリアン、共和制、社会民主主義、アナーキズム、住民投票、その他と、多くの理論と様態が存在するとしている。

プラグマティズム

アメリカにおける思想的背景を考えていくにあたり、プラグマティズム（pragmatism）について紹介しておく必要があるだろう。実用主義とも訳されるプラグマティズムとは、もともと、パースが、我々が対象を認識する過程に現れてくる様々な「概念」を分類し、はっきりと定義するため、科学実験の方法を応用することを試みる文脈で用いた言葉である（仲正、2008）。その後、James（1907 柘田訳 1957）によって、哲学する基本的姿勢や、真理観・世界観に関わる言葉として拡大した意味で使われ、「予め設定された既成概念抜きに、人間の現実の『経験』に即して思考しようとする“アメリカ的な哲学”の流儀」をも指すようになった（仲正、2008, p.12）。Dewey（1916 松野訳 1975/2000）を基準とする「プラグマティズム」の特徴として、1. 概念を目の前の現象を解明するための暫定的な道具にすぎないとみなす、2. 判断や理論の真偽の基準を現象を説明するうえでの有用性や機能性に求める、3. 理論と実践は常に相互作用しながら不可分一体の関係にあるとみなし、理論／実践の間の対立を認めない、が挙げられる（仲正、2008）。

このアメリカ的哲学の流儀であるプラグマティズムとは、ヨーロッパに比べて相対的に歴史の浅いアメリカにおいて、過去ではなく、現実の関係によって物事を理解しようとする志向性によって育まれた考え方であるといえよう。仲

正（2008）は、ヨーロッパで生まれた自由と平等の精神が定着しているアメリカの民主的な社会を詳細に分析した『アメリカのデモクラシー』を記したTocqueville (1835 松本訳 2005) について言及し、彼が「アメリカ人の“非哲学性”を、伝統的に継承されてきた体系から独立に自分の頭で思考する知的自由、そして自分の目で見えたものしか信頼しない合理的精神の現れとして肯定的に評価しようとしている」（仲正, 2008, p.11）と紹介している。

アメリカの反知性主義

次に、アメリカの思想背景を理解するもう一つのキーワードとして、アメリカの反知性主義（anti-intellectualism）に言及したい。反知性主義について『アメリカの反知性主義』を著したHofstadter（1963 田村訳 2003）は、次のように紹介している。

私が反知性主義と呼ぶ心的姿勢と理念の共通の特徴は、知的な生き方およびそれを代表するとされる人びとに対する憤りと疑惑である。そしてそのような生き方の価値をつねに極小化しようとする傾向である。あえて定義するならば、このような一般的な公式が成り立つだろう。（p.6）

アメリカの反知性主義について紹介した森本（2015）は、反知性主義とは、単なる知性への軽蔑と同義ではなく、「知性が権威と結びつくことに対する反発であり、何事も自分自身で判断し直すことを求める態度である」（p.177）と紹介している。知性が知らぬ間に越権行為を働いていないか、権威を不当に拡大使用していないかを敏感にチェックしようとするのが反知性主義という。

反知性主義の考え方が、アメリカの平等を求める熱量に支えられていることは、次に挙げるHofstadter（1963 田村訳 2003）の考察からも見て取れる。

反知性の立場は、ある架空の、まったく抽象的な敵意にもとづいている。知性は感情と対峙させられる。知性が温かい情緒とはどこか相容れないという理由からである。知性は人格と対峙させられる。知性はたんなる利発さのことであり、簡単に狡猾さや魔性に変わり、と広く信じられているからである。知性は実用性と対峙させられる。理論は実用と反対のものだと考えられ、「純粹に」理論的な精神の持ち主はひどく軽蔑されるからである。知性は民主主義と対峙させられる。それが平等主義を無視する一種の差別だと感じられるからである。（p.41）

すなわち、特権階級のように君臨する知性は、実用的ではなく、民主主義的

ではなく、平等主義を破壊するものと見なされていた。これは先にあげた、歴史の変遷からみるアメリカのアイデンティティであるところの民主的で平等な社会を求めるという側面とも一致する。

民主主義・科学・プラグマティズムの接合点: “Nothing is so practical as a good theory.”

本節では、クルト・レヴィンとその思想、また、NTL (National Training Laboratories) の展開について紹介する。具体的には、「よい理論ほど実際に役に立つものはない (Nothing is so practical as a good theory.)」というレヴィンの言葉 (Marrow, 1969 望月・宇津木訳 1972) が、上記にあげた民主主義・科学・プラグマティズムを接合する言葉であることを指摘する。

レヴィンは、ナチスドイツから亡命する形でアメリカに渡った心理学者であり、人間の相互作用を科学的手法で検討をするグループ・ダイナミックスの創始者としても知られる。

本節では、レヴィンが上記の3つのキーワードを接合させることになった点として、2つの点を挙げたい。

第一は、科学ということと、民主主義という点の両立を示した点である。1930年代末から第2次世界大戦中にかけてアメリカは、ドイツ、イタリア、日本などの枢軸国を全体主義的 (もしくはファシズム的) 体制をとる「自由の敵」とみなしていた (仲正, 2008)。全体主義体制とは、単一のイデオロギーあるいは世界観によって、国あるいは社会全体が一元的に統合されていて、近代的な自由民主主義の特徴である思想信条の自由や、民主的な手続きに基づく意思決定プロセスとは相容れない政治体制である。民主的リーダーシップ・民主主義の肯定は、今でこそ社会の軸に据えられると捉えられる考え方であるが、全体主義体制の勢力は強く、議論なしに棄却できるようなものではなかった。

そうしたなかに、彼が、Lippittらと行ったリーダーシップに関する研究 (Lewin, Lippitt, & White, 1939) は、意義深い。この研究では、リーダーシップが3通り (専制的、放任的、民主的) 準備され、そのリーダーのもとでのフォロワーの行動が観察された。その結果は、民主的リーダーのもとでの行動が、リーダーの不在時も良好なパフォーマンスを示すというものであった。

これは結果とともに、その検証方法自体も示唆的である。具体的には、結果として民主的リーダーが優れていたということの他に、研究者が情動的に民主的なリーダーが優れていると思っていたとしても、科学的検証の場にその是非を問うたという点である。ここで言うグループ・ダイナミックスにおける科学的検証とは、一人ひとりをデータのうえで等価値に扱い、検証を加えることを指す。たとえば、グループ間の比較であれば、メンバー一人ひとりを $n = 1$ のデータとして扱い、グループ毎に平均値を算出し、比較、検証を行う。すなわち、こうした人に関する研究における科学的探究とは、一人ひとりをデータとして

等価値に扱っているという点で、ある種の民主主義の手続きと同義と言えるだろう。

また、「今ここ」の関わりで起こる事象を素材として、人間関係やリーダーシップなどについて学びを深めるTグループ（トレーニング・グループ）の発端となるコネチカットでのワークショップでは、ワークショップのグループで起こっていたことをスタッフがふりかえっている際に、参加者の主観の報告が非常に有効であることが「発見」されたと言われている（e.g., Bradford, Gibb, & Benne, 1964 三隅監訳 1971）。このエピソードは、人と人との間に起こっていることの理論化を志向する際に、主観の報告が非常に価値を持つという点を示している。「私にはこう見えた」「私はこう考えていた」ということが科学的探究において価値を持つというこの事例は、一人ひとりの主観的評価を等価値で扱う点で平等主義の観点からも受け入れやすい考えであったことが伺える。

実際、このワークショップをもとに、集中的なグループ体験を通してグループ・ダイナミクスやリーダーシップについて学ぶTグループについて書かれた書籍の中では、「現在の実際活動において脅かされているかまたは十分発達していない諸価値」として、「科学のもつ価値・民主主義のもつ価値・助力関係（helping relationship）のもつ価値」の3つを紹介している。下記は、民主主義に対する関心、として紹介されている一部である。

トレーニング・ラボラトリの革新者たちは科学的研究に内在する価値と民主主義の価値の間に極めて緊密な血縁関係があることを信じていた。この血縁関係はたんに民主主義と科学が西欧では混在している、という歴史的事情によるだけではない。科学に内在する価値と、民主主義で強調される価値には、広い範囲にわたって一致性が存在する。（p.13）

（略）

トレーニング・ラボラトリの革新者たちは、広い範囲にわたって、民主主義の持つ倫理と科学の持つ倫理の間に一致点を見出していたのである。困難や問題に直面した時に現実的な態度をとるということ、問題解決過程における自己の見解、見通し、好悪に関してどこまでも客観的であるということ、問題の選定や解決において、理性的に協力しようとする気持ちになることは、明らかに科学的なムードにつながるものであるが、同時に民主的な道徳性が要求するものでもある。さて、それならば実際にどうしたらよいかといえば、それは、これらの価値が、個人的また集団的な意思決定や問題解決の過程において具象化されるように、人々を援助するような教育的過程を設計することである。（pp. 13-14）

このように、民主的であることと科学的であることは、ラボラトリー・トレーニングにおいては、非常に近い価値と見なされていたと言えよう。

第二は、集団における人の思考・行動を分析する際に、今ここの、その場に働く力を考慮したという点である。グループでの個人の行動・思考を捉える際、その場で働く力の分析を通して捉えようとしたレヴィンのグループ・ダイナミックスの視点は、個々人の養育歴など、過去の経験をもとに個人の行動を理解しようとするフロイトの精神分析へのアンチテーゼとしての側面も持っていたことが伺える (e.g., Bradford, Gibb, & Benne, 1964 三隅監訳 1971)。この視点は、物事の理由を過去や歴史ではなく、今ここに働く要因に求めるという点で、“プラグマティズム的”、“アメリカ的”であるとも言えるかもしれない。

実際、過去に対するアメリカ人の姿勢は、歴史的経緯にその由来を持つと考えられる。Hofstadter (1963 田村訳 2003) は、アメリカ人の過去に対する姿勢として下記のように考察を加えている。

まず最初に、過去に対するアメリカ人の姿勢を考えてみよう。この姿勢は、アメリカの技術文化によって大きく影響されてきた。よくいわれるように、アメリカは遺跡や廃墟がない国だ——つまり、代々受け継がれてきた人間精神の痕跡がない。ヨーロッパ人は例外なくこの精神とともに暮らしており、大卒でみれば、ごく素朴な農民や労働者ですらその規制から逃れることはまずない。アメリカは過去から逃れてきた人びとの国であり、住民のほとんどは自分の過去を削除しようと心に決めて移住を選択した人びとである。

(略)

過去は実用性と独創性に欠ける卑しむべきものとして、またたんに乗り越える対象として見られた。アメリカ人の過去に対する蔑視は一八世紀末から一九世紀初頭にかけて現れたが、こうした見方に積極的に評価すべき側面があったことは覚えておく必要がある。過去への蔑視の根底にあるのは、歴史の重圧から脱却することのみを目的とした科学技術的・物質主義的野蛮主義ではない。アメリカ人の姿勢はなによりも君主制や貴族性に対する、そして人民からの無慈悲な搾取に対する、共和主義的で平等主義的な抗議を象徴していた。(pp.209-210)

さらに、アメリカにおける考え方について、Hofstadter (1963 田村訳 2003) は「信仰」と「普遍的な姿勢」という言葉を使い、実用性と直接経験への態度、過去への侮蔑、自助と自己啓発について言及している。

しかし、より広く解釈して知性そのものへの疑念と捉えるなら、彼

ら（実業家: 引用者注）の反知性主義は、アメリカ人の生活ほぼ全域に広がる実用性や直接経験などへの信仰の一部である。（p.208）

（略）

ビジネスをあつかった文学が実利優先の考え方を強調していることから明らかなように、知性への恐れと文化軽視は実業界の反知性主義によくみられるものだ。その基盤になっているのは、文明と個人的信条に対するアメリカ人のふたつの普遍的な姿勢——第一は多くの人びとに共通する、過去への蔑視、第二は自助（セルフヘルプ）と自己啓発という社会的倫理規範である。この規範の下では、信仰心すら実利主義の道具になってしまう。（p.209）

ここで挙げられている、実用性、直接経験への態度、過去への侮蔑、自助と自己啓発というキーワードは、「今ここ」の一人ひとりの主観的評価の一つひとつのデータとして等価値に扱い、実際に役に立つ良い理論を導こうとする手法と一致する。すなわち、主観的評価・平等という民主主義にまつわる言葉と、「知性=科学=理論」という言葉は相対するように捉えられる中、レヴィンは「よい理論ほど実際に役に立つ」というプラグマティズムの要素も含んだ言葉と実践を通して、主観的評価を平等に扱うことで実際に役立つ理論を構築できることを明確に示したと言えよう。

レヴィン、そして、NTLの切り口は、アメリカ人が持っていた姿勢に合致し、プラグマティズム的であり、民主主義的であり、平等であり、科学的でもあるという点で、民主主義・科学・プラグマティズムの接合を示したものであると言える。「よい理論ほど実際に役に立つものはない（Nothing is so practical as a good theory.）」という言葉は、こうした意味においても、様々なディシプリンを持つ者をつなぐ生成的イメージ（generative image）として機能（Bushe & Marshak, 2015 中村訳 2018）したのかもしれない。一人ひとりの直接経験を重視しつつ、民主主義の再学習として、ある種の自己啓発的な要素も組み込んでいたラボラトリー・トレーニングは、内容としても手続きとしても多分にアメリカ的要素を含んでいたことも、その後に広く展開をしていくこととも関係しているだろう。

民主主義と教育に関して論じたデューイ（e.g., Dewey, 1925）と、レヴィンの志向性について、Gordon Allportは民主主義の再学習必要性という点において、類似性を指摘している（Lewin, 1948/1997 末永訳 2017）。

クルト・レヴィンの仕事とジョン・デューイの仕事との間には明らかな類似性がある。2人とも民主主義は世代ごとに新しく学習されねばならぬこと、またそれは専制主義よりもはるかに獲得しがたく維持しがたい社会構造の一形式であるということを一貫して承認す

る。また2人とも民主主義が社会科学に対して親密な依存関係にあることを認めている。集団の道具だての中における人間性の法則について知悉し、それに従うのでなければ、民主主義は成功しえない。また研究と理論の自由は民主的な環境の中でだけ与えられるものであるが、それがなければ社会科学はきっと失敗に終わるのであろう。デューイは民主主義のすぐれた哲学的代弁者であり、レヴィンはすぐれた心理学的代弁者であるともいえよう。民主的リーダーであるとか民主的集団構造を造るということがなにを意味するのかということ、彼は具体的操作の用語で誰よりもはっきりとわれわれに示した。(1948年版へのまえがき, xi)

コネチカットでのワークショップを機に、集中的な人間関係に関する体験を素材として学んでいくトレーニング・ラボラトリーを中心とする学びは、NTLの活動として展開をしていくことになった。Hirsch (1987) が、NTLの展開を紹介した本のタイトル (The History of the National Training Laboratories 1947-1986: Social Equality Through Education and Training) である、「教育とトレーニングを通じた社会的平等」という言葉は、平等への希求が推進力になったという意味においても、NTLが果たした役割を端的に表しているだろう。

民主主義と科学を捉え直す視点

ここまで本論考では、アメリカの思想的背景を紹介し、レヴィンとNTLの切り口が民主主義・科学・プラグマティズムの接合点を示したと論じた。具体的には、民主主義の学習の必要性について、レヴィンの功績に関してふりかえる際、(1) 内容として、民主主義、民主的価値を理想とすることがある他、(2) そこに至る方法 (実証的、オープンに探究する) が民主主義的であるということが指摘できよう。

本論考では、最後に、民主主義の位置づけ、また、科学と民主主義との関係を捉え直す視点として下記の2点から考察を加える。

第一は、政治形態としての民主主義の優位性についてである。レヴィンは、リーダーシップの研究から、政治形態としても民主主義の優位性を説いていた。論考のなかには、ドイツを民主主義に改めるにはどうしたらよいか、というような問い立てのもと、「科学的に見て理のある事柄は結局すべての場所で受け入れられるはずだと信ずることは、アメリカのように完全な民主主義的な伝統の中に住む人々には『自然な』ことと思われる」(p.84) といった主張も行なっている (e.g., Lewin, 1948/1997 末永訳 2017)。

ただし、民主的であること、民主主義的価値の実現を、どこにどのように行なっていくことがよいかということは、依然、難しい課題として存在し続けて

いるだろう。最初にあげたように、政治形態としての民主主義は、その社会実装のやり方は複数あるうえ、民主主義という意味合いも歴史的に変化することから、民主主義の敷衍が、どの環境、どの文脈において、有効かということは丁寧に検討をしていく必要がある。たとえば、市場原理を非経済的領域にも拡大して適用するような新自由主義といった考え方と結びつくことにより、民主主義の目指すものが失われていってしまうこと（e.g., Brown, 2015 中井訳 2017）、また、民主主義の学習としてのシチズンシップの教育（e.g., Biesta, 2011 上野・藤井・中村訳）など、他の思想との組み合わせや、民主主義の前提条件などについても引き続き議論を重ねていく必要があるだろう。

言い換えるならば、社会のミクロからマクロの様々な層（レイヤー）において、民主主義的な手法をどのように取り入れ、埋め込んでいくのかということ、を、丁寧に考えていく必要がある。このことについて言えば、たとえば、組織への働きかけを考えていく組織開発の視点から、文化・社会に埋め込まれたシステムとして組織を捉えながら、さらに、その中においてサブシステムとしてグループを捉えていくような視点を持ち、そのなかで、民主主義的な仕組みや価値をどこにどのように埋め込み、実現していくのかを考えていくという戦略的な発想を持つことも必要となってくるだろう。

第二は、科学と民主主義との関係についてである。先の議論では、人を対象とした科学的検討においては、一人ひとりの行動が、科学的検討のデータとして等価値に有効であった可能性を指摘した。レヴィンのこうした研究文脈においては、科学と民主主義は近い概念として存在していたことが伺える。一方、行動や物事の意味の探究も含めた研究という文脈で捉えると、社会構成主義、質的研究をはじめとしたポスト実証主義（e.g., Prasad, 2011 箕浦監訳 2018）を含めた展開が存在する。こうした展開のなかには、実証主義と同義であるような印象を持たせる科学という言葉では捉えきれない側面もあると考えられることから、科学という言葉を中心に据えることにより、扱う事象を狭めてしまうこともあるのではないだろうか。

むしろ、体験学習を通した民主主義の再学習という文脈では、科学的という言葉ではなく、広く研究・探究をしていく、という言葉で捉え直すことがよいかもしれない。この捉え直しにより、関係の中で起こっていることを、オープンに探究するというアプローチを広く含むことができるだろう（e.g., ナラティブ・アプローチ）。このように、民主主義との関係においては科学という言葉、研究・探究という文言で捉え直すことにより、一人ひとりを尊重していくという意味での民主主義の精神を引き継ぐことが可能になると考えられる。

終わりに

本論考では、体験学習を通した民主主義再学習の思想的背景について、主に、民主主義・科学・プラグマティズムとの関係から、その現代の特徴を論じた。

本論考から見えてきたのは、LewinとNTLの展開と、アメリカという思想的土壌との一致性についてである。考察で述べたように、その意味づけについては若干の捉え直しが必要なものの、目の前にいる者とともに探究していくということの意味は、今後も非常に有効でありつづけるだろう。

本論考では扱えなかったが、アメリカの思想的展開として、いわゆるスピリチュアリティと結びついた流れも存在する。具体的には、William Jamesの切り口から、18世紀の大覚醒、エサレン研究所に端を発するヒューマン・ポテンシャル・ムーブメントへとつながる系譜も存在する (e.g., Anderson, 1983 伊東訳 1998)。今後は、Tグループとそれらの展開の関係についても論じたい。

引用文献

- Anderson, W. T. (1983). *The Upstart Spring: Esalen and The American Awakening*. Reading: Addison-Wesley.
(アンダーソン, W. T. 伊東博 (訳) (1998). *エスリンとアメリカの覚醒: 人間の可能性への挑戦* 誠信書房)
- Biesta, G. J. J. (2011). *Learning Democracy in School and Society*. Brill Sense.
(ビースタ, G. 上野正道・藤井佳世・中村 (新井) 清二 (訳) *民主主義を学習する: 教育・生涯学習・シティズンシップ* 勁草書房)
- Bradford, L. P., Gibb, J. R., & Benne, K. D. (1964). T-Group theory and laboratory method: Innovation in re-education.
(ブラッドフォード, L. P., ギップ, J. R., ベネ, K. D. 三隅二不二 (監訳) (1971). *感受性訓練: Tグループの理論と方法* 日本生産性本部)
- Brown, W. (2015). *Undoing the demos: Neoliberalism's stealth revolution*. New York: Zone Books MIT Press.
(ブラウン, W. 中井亜佐子 (訳) (2017). *いかにして民主主義は失われていくのか: 新自由主義の見えざる攻撃* みすず書房)
- Bushe, G. R., & Marshak, R. J. (2015). *Dialogic Organization Development: The Theory and Practice of Transformational Change*. Oakland, CA: Berrett-Koehler.
(ブッシュ, G. R., マーシャック, R. J. 中村和彦 (訳) (2018). *対話型組織開発: その理論的系譜と実践* 英治出版)
- Dewey, J. (1925). *Democracy and education*. In Jo-Ann Boydston (Ed.), *John Dewey. The middle works (1899-1924), Volume 9*. Carbondale: Southern Illinois University Press.
(デューイ, J. 松野安男 (訳) (1975). *民主主義と教育* 岩波書店. デューイ, J. 河村望 (訳) *デューイ＝ミード著作集〈9〉民主主義と教育* 人間の科学新社)
- Hirsch, J. I. (1987). *The history of the National Training Laboratories, 1947-1986: Social equality through education and training*. Peter Lang Publishing.
- Hofstadter, R. (1963) *Anti-intellectualism in America*. New York, NY: Alfred

- Knopf.
(ホーフスタッター, R. 田村哲夫 (訳) (2003). アメリカの反知性主義 みすず書房)
- James, W. (1907). *Pragmatism*, Harvard University Press
(ジェイムズ, W. 榊田啓三郎 (訳) (1957). 岩波文庫)
- Lewin, K. (1997). *Resolving social conflicts, and field theory in social science*. Washington, DC: American Psychological Association. (Reprint. Original Harper and Row, New York 1948).
(レヴィン, K. 末永俊郎 (訳) (2017). 社会的葛藤の解決 ちとせプレス)
- Lewin, K., Lippitt, R., & White, R. K. (1939). Patterns of aggressive behavior in experimentally created "social climates". *The Journal of Social Psychology*, 10, 269-308.
- Marrow, A. J. (1969). *The Practical Theorist: The Life and Work of Kurt Lewin*. Basic Books, Inc. N. Y.
(マーロー, A. J. 望月衛・宇津木保 (訳) (1972). クルト・レヴィン: その生涯と業績 誠信書房)
- 森本あんり (2015). 反知性主義: アメリカが生んだ「熱病」の正体. 新潮社
- 仲正昌樹 (2008). 集中講義! アメリカ現代思想: リベラリズムの冒険 NHK出版
- Prasad, P. (2005). *Crafting qualitative research: Working in the postpositivist traditions*. Armonk, N.Y.: M.E. Sharpe.
(プラサド, P. 箕浦康子 (監訳) (2018). 質的研究のための理論入門: ポスト実証主義の諸系譜 ナカニシヤ出版)
- Tocqueville, A. (1835). *De la démocratie en Amérique*. Paris: Michel Lévy.
(トクヴィル, A. 松本礼二 (訳) (2005). アメリカのデモクラシー 岩波文庫)

The Ideological Background of Democracy Re-learning through Experiential Learning: Democracy, Science, and Pragmatism

Koji Tsuchiya

(Department of Psychology and Human Relations, Faculty of Humanities, Nanzan University)

This paper discusses the ideological background in the United States that supported the development of democratic re-learning through experiential learning. More specifically, in addition to the keywords democracy, science, pragmatism, American anti-intellectualism, Kurt Lewin and the NTL, the words “Nothing is so practical as a good theory.” existed as a junction of the keywords. Finally, it introduces the current understanding of democracy and science, and points out the necessary issues for future discussion.

Key words: Experiential Learning, Democracy, Science, Pragmatism, NTL